子どもの意欲や主体性を高める生活科授業

～対象との対話を重視したおしろの動物園学習より～

中西　正子

１学期のまちたんけんで子どもたちがくり返しかかわった場所は長町公園やだんご屋さんであった。そこで出会ったおじいちゃんおばあちゃんにインタビューしたり，シロツメクサのかんむりの作り方を教わったり，ペタンクを体験させてもらったり，工場を見学させてもらったりと地域でくらす人々・はたらく人々にふれ合う喜びを感じることができた。

２学期はさらに気付きの質を高めることが課題であると感じ，和歌山公園動物園に対象をしぼった。「とくいなこと調べ」や「しぐさ観察」といった視点を持って動物に向き合うことで，子どもたちは発見する喜びを感じることができた。そして発見したことの意味づけをしたり，他者と交流したりすることで，さらに対象に向き合う意欲が高まった。子ども一人一人の願いや思いをさらに引き出し，反映させる表現方法を探ることが今後の課題である。

キーワード：まちたんけん，地域，気付き，意欲，主体性，対象との対話

１．意欲や主体性を高める

２年生の子どもたちは「やってみたい」「試してみたい」という意欲にあふれている。その意欲を持続させたり，「もっとこうしてみたい」「こうしたらどうなるだろう」という発展的な考えをもたせたりすることが大切だと考えている。

そこで「おもしろそうだなあ」と興味・関心がわく学習の入り口を用意し，気付く喜び，みんなと学ぶ楽しさを感じられる単元計画を組むことによって，意欲を持ち続け，主体的に学ぶ子を育てることができるのではないかと考えた。

１．１．学びをデザインする姿

意欲を持ち続け，主体的に学ぶ姿＝学びをデザインする姿を次のようにとらえ，研究をすすめた。

・夢中になって対象に向き合い，くり返しかかわろうとする。
・気付きや疑問を生み出しながら，友達とともに楽しんで課題を解決しようとする。
・自信をもって話す・興味を持って聴く。

一方，子どもたちには，この１年間で「わくわく」することをいっぱい見付けようと呼びかけ，どの教科においても適宜，振り返りの際に意識させてきた。

１．２．１学期のまちたんけんで見えてきたこと

１学期のまちたんけんでは，小学校の周りを東へ西へと歩き，興味あるコト・モノを見つけるところからスタートした。

そして，全員が絵や文で気軽に振り返りができるように，「楽しかったこと」「分かったこと」「見つけたこと」「もっと見たいこと」という視点で発表させたり，書かせたりした。その表現から子どもたちは長町公園やだんご屋さんに興味をもっていることが分かり，くり返しかかわることになった。

公園でおじいちゃんおばあちゃんにいっしょにペタンクをさせてと願い出たり，いつも公園を散歩するおばあちゃんにシロツメクサのかんむりの作り方や四つ葉のクローバーを見つけるこつを教えてと願い出たり，だんご屋さんに作っているところ見せてと願い出たりした。自分から働きかければ，その願いは届くことが分かり，地域で生活している人たちにかかわる楽しさを感じることができたようだ。

そのあたたかいふれ合いを通して，友達と遊ぶのが苦手だった児童が輪の中に入っていけるようになったり，あいさつができなかった児童が「ありがとう」「さようなら」と自信をもって言えるようになったりした。彼らは単元を通しての振り返りに自身の成長に気付く言葉を書いていた。

自分たちで地域にくり出していき，様々な学びをしたことで，学級としても，安心して意見を言い合えるようになった。

この学び合う集団の質をさらにあげるために，「夢中になって対象に向き合い，くり返しかかわろうとする」子どもにしていくことが重要であると考えた。つまり対象との対話を充実させること，とりわけ生活科においては気付きの質を高めることである。そこで２学期は，「おしろの動物園～もっと見つけたいなまちの『わくわく』～」という単元を組み，和歌山公園動物園に対象をしぼった。

２．気付きの質を高める

気付きの質を高めるための手立ては次の２点である。

①視点を持たせるワークシート
②気付きの共有と意味づけ

2．1．視点を持たせるワークシート

視点を持たせるために３種類のワークシートを使った。（動物教材研究所　松本朱実氏　提供）

これらをスケッチブックにはって動物園に出かけた。

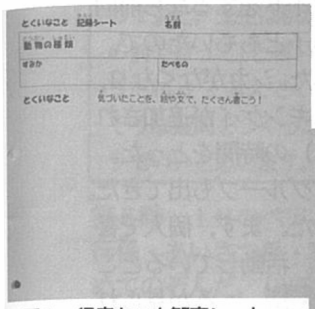

図１　得意なこと観察シート

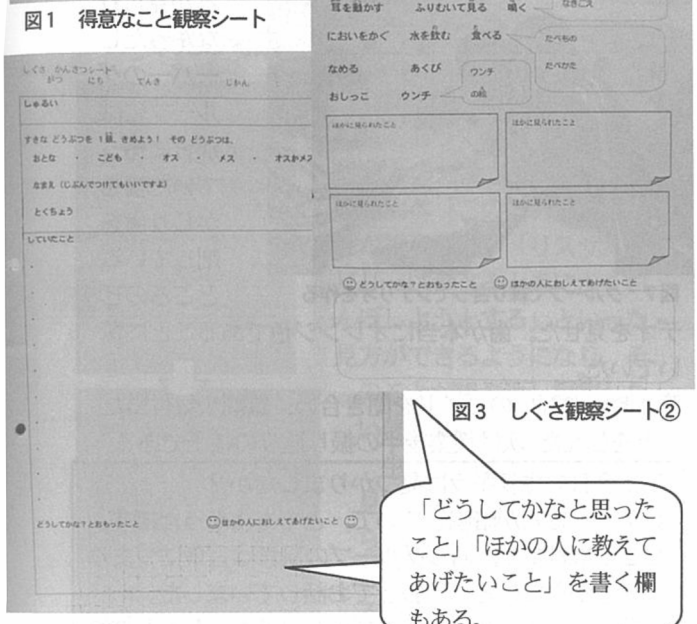

図３　しぐさ観察シート②

「どうしてかなと思ったこと」「ほかの人に教えてあげたいこと」を書く欄もある。

図２　しぐさ観察シート①

2．2．気付きの共有と意味づけ

動物園で気付いたことを共有する際，動物教材研究所のM先生に意味づけをしていただいた。このことで子どもは，自分で気付くことのおもしろさを実感できるようになる。自分の目で見て気付いたことは何にも増して値打ちのあることなのだと実感し，自信が芽生える。どんな図鑑にも載っていない，おしろの動物園の動物たちのヒミツがスケッチブックに蓄積されていく喜びが味わえる。

また，２学期は振り返りの際に，１学期の「楽しかったこと」「分かったこと」「見つけたこと」「もっと見たいこと」に加え「気付いたこと」「感じたこと」「ふしぎに思ったこと」「今日のキラキラ」「ちょこっとアドバイス」という視点を持たせた。

絵や文で表現したものを見せ合って，話し合うことで友達の気付きとの共通点や違いが分かりやすくなるのではと考えた。友達の気付きに刺激をうけて「もっと観察したい」「くわしく知りたいから，次行った時にたずねてみたい」という思いが生まれるであろう。

3．単元の実際

おしろの動物園

～もっと見つけたいなまちの「わくわく」～

＜単元目標＞

・和歌山公園動物園の動物を観察したり，飼育員や市民ボランティアの方々と交流したりして，新たなまちの「わくわく」を見つけようとしている。

・自分が感じたり見つけたりしたことを工夫してわかりやすく伝えようとしている。

＜第１次　　動物園を知ろう＞

第１時　「わたしは動物園が好き（嫌い）です。なぜなら～」というはじまりで「動物園とわたし」という作文を書いた。

その結果，動物園が嫌いな子どもが７人。理由は「くさいから」だった。「どちらでもない」という意見も出た。その理由は，動物は好きだが，動物園は嫌いだという。児童17は「十分にえさ・すきなものを与えられていない。掃除をされていない動物がいるから」と答えた。児童17は「動物には『ことば』があります。みなさんも動物語を話せるようになってください。」とも書いていた。

一方，好きな理由の大半は「動物が好きだから」。彼らの多くは犬や猫，金魚などのペットとして動物が好きという結果であった。またワールドサファリでの体験（児童７）やイルカショー（児童15）のことを書いている子もいた。動物とのふれ合いをもとめる傾向がうかがえる。

第２時　M先生，わかやまフレンＺＯＯガイド・K先生・G先生をお招きした。M先生のチンパンジーの飼育員としての経験を聞き，動物とのふれ合い方を学んだ。動物がされて嫌だろうなと思うことはしないことを確認した。おしろの動物園クイズから子どもたちは動物に会いたいと期待感をもった。児童25は「クイズの答えが本当かどうか自分で確かめたい。」と振り返りに書いていた。

第３時　初めて動物園訪問。２～３の動物にしぼって得意なこと調べ（図１）をした。動きをじっと見て，その動物の得意なことを考えてみる。そして絵や言葉で記録した。絵が苦手な子もいるかと思ったが，全員が夢中で動物スケッチをしていた。上手下手にとらわれず，本物を見ながら描くおもしろさを堪能していた。帰校後，アンケートをとると，全員が「とてもたのしかった」か「たのしかった」と回答。気付いたこと，もっと知りたいこと・調べてみたいことがあふれてきたようだ。

図４　絵を描いたり，飼育員さんと話をしたり

＜第２次　動物を観察しよう・動物園にかかわる人々とふれ合おう＞

第１時　１回目の動物園訪問で描いてきた絵をもとに気付いたことの発表をした。「メスとオスの見分け方」や「くちばしやしっぽの様子」「とくいなこと」に興味が向いていた。

図５　絵を見せながら気付いたことを話し合う

第２時　２度目の動物園訪問はアメリカビーバー・ミーアキャット・シカ・クジャク・オウム・マーラ・ペンギン・リスザルの８種類に分かれ「しぐさ観察」（図２）を行った。

図６　気付きの共有と意味づけ

気付きの共有で，ペンギンチームは２頭の見分け方を発表。泳ぎ方もペンギンのぬいぐるみを使って実演した。（図６）

その他のチームも気付いたことを発表していった。その都度，ミーアキャットやリスザルが住んでいる場所の写真やビーバーのような齧歯目の動物の歯の模型を提示しながら，M先生が子どもたちの気付きの意味づけをしてくれた。

第３時　２回目の動物園訪問で気付いたこと・発見したこと・不思議に思うことを中心に作文を書いた。１学期は振り返り作文で，なかなか鉛筆がすすまなかった児童９や児童11が何の支援も必要とせず，自分の力で書き進めることができた。

ペンギンを見て気付いたこと。１頭は太くて小さくて，ジャンプも下手で，泳ぐのも下手でした。もう１頭は背が高くて細くてジャンプもとくいで泳ぐのもうまかったです。

分かったことはおなかがすいているときは，ドアをくちばしではさんでいたことです。太いほうはくちばしを下にして何回もはさんでいました。おなかがすいているのに水はのんでいませんでした。ドアの中に行ったり外に行ったりうろうろしてごはんがくるのをまっていました。えさの入れ物に魚が入っていないかずっと見ていました。

なるほどと思ったこと。ペンギンは朝はまったく泳がなかったです。朝は寒いからかなと思いました。魚を食べるときは頭から食べていることが分かりました。ペンギンは泳ぐときに手をふって泳いで，おきにあがるときは下にもぐってじょそうをつけてジャンプしておきにあがりました。

ふしぎに思うことは，なぜ頭から魚を食べるのかということとなぜ鳥には歯がないのかということです。（児童11）

児童11はこの後もペンギンの観察に没頭していた。

＜第３次　　動物ガイドをしよう＞

第１時　わかやまフレンＺＯＯガイド・本校３年生のＡさんにペンギンガイドをしに来てもらった。「こんなのをぼくらもやってみたい」という声があがった。

第２時　３回目の動物園訪問。ガイドをするなら前回観察した動物と違うものにしたい子どももいたので，気になる動物の推移を書かせてみた。シカがなくなり，ツキノワグマ・ウサギ・インコ・キンケイが追加された。たっぷりとしぐさ観察（図３）の時間をとった。実際に檻の前でガイドをしてみるグループも出てきた。

第３時　ガイドのシナリオを作った。まず，個人で書いて，そのあとグループで考えた。活動しているところが見られなかったビーバーのグループには，別日に撮っていた柵をかじり歯を削っているところのビデオを見せた。歯が本当にオレンジ色であることに驚いていた。

図７　グループで練り合ってシナリオを作る

第４時　お互いのガイドを聞き合い，質問や気付いたことを伝えた。次は授業後半の振り返りの様子である。

Ｔ：今日のキラキラは見つかりましたか？
Ｃ７：Ｓさんが暗唱していて，とてもよかったです。
Ｃ２：M君です。同じグループのM君は言葉につまりながらだけど，頑張ってお話していました。
Ｃ19：ツキノワグマグループさんがベニーちゃんのつめのことを教えてくれて，おもしろかったです。
Ｔ：へぇ～。みんなもつめの話きいた？
（聞けていない子どもが多かったので，Ｃ22とＣ26に再びみんなの前でガイドをさせた。）
Ｃ15：獣医さんが麻酔をかけてつめを切ると言ったけれど，どうやって麻酔をうつの？
Ｃ22とＣ26：分からない。
Ｔ：分からない時は，どうする？
Ｃ：M先生が見に来てくれているからきいてみたい。

図８　ツキノワグマと獣医さんの話を聴く

この日，児童15は次のように書いていた。

> 私はグーでちょびっと手をあげました。先生を手で『おいでおいで』して呼びました。そして前からずっと思っていたことを言いました。『クマにどうやって麻酔をうつの？』と。先生は私が「言えない」と言ったのに「みんなの前で言って」と言いました。みんなは私の話をきいて「そうだね。」と考えてくれました。（中略）みんな分からなさそうな疑問をつくったので，私は自分がものすごくキラキラでいいと思います。（児童15）

第5時　1Bのペアさんに動物園でガイドをした。進行係・あいさつ係・説明係・集合係など自分たちで決めてのぞんだ。（以降の学習活動は省略）

4．単元の考察

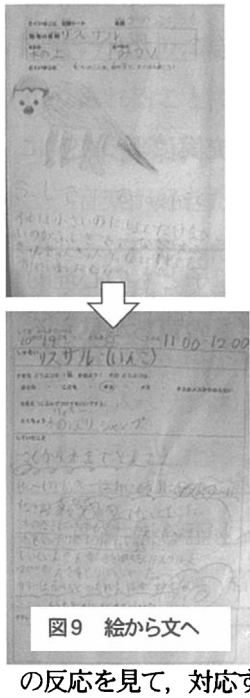

図9　絵から文へ

動物を漠然と見るのでなく，視点をもって観察したことで，対象との対話が充実した。2頭を比べ「このペンギンは泳ぎが得意」とか「リスザルのリリーは食べるときにかくれんぼしようとする」といった見方ができるようになり，そのことが繰り返し観察したい気持ちにさせた。

生きているものを一緒に見て，相手にも楽しんでもらう動物ガイドは子どもたちにとって，ジャンプのある課題であった。ガイドの内容を話し合って決めていても，檻の前では動物の動きにあわせて，また聞き手の反応を見て，対応する必要があった。ビーバーがガイドの最中に動いたことやいつもかくれんぼしながら食べるリスザルがガイドの時は様子が違ったことに興奮しながら，言葉を選んで話す子どもたちの姿があった。その興奮が伝わってくる児童24の振り返りである。

> ガイドをしていて3回目のときに水にぼっちゃ～んと入りました。そしてずっとぐるぐる回るビーバーでした。すごかったです。もう1ぴきは家の中で泳いでいました。そして後ろ足でかきかきしていました。
>
> 泳いでいたビーバーは1回だけ水の中にもぐっていました。最後にさくをかんでいました。すごかったです。また見たいです。（児童24）

気付いたことを発表・交流する方法は「動物ガイド」以外にも色々考えられるだろうし，ガイドをするにしても表現の方法はさらに工夫の余地があったので，それを引き出し，支援できるようにしたい。

5．成果と課題

ある日曜日，和歌山市公園動物園で市民Z○○フェスティバルが開かれた。興味をもった子どもたちも家の人に連れてきてもらっていた。

そんな中，単元のはじめに動物は好きだけど動物園はくさくて嫌いと書いていた児童7が母親と一緒に訪れた。「先生，私ハッとさせられました。」と母親が切り出す。「動物園に向かって歩いてくる途中『くさくないかな？大丈夫？』と娘に言ってしまったんです。すると「『お母さん，動物たちはみんなここで生きているの。生きているにおい』と娘に返されました。」と・・・。この児童7は家で金魚を飼い始め，よく世話をしている。「逆立ちしたのが本当にかわいく見えた」など日記に書いていることから，1匹1匹の動きもよく見ている。

最後に年明けに動物園に訪れた際の振り返りをとりあげたい。

> Tくんも作文帳に書いていたんだけど，リリーが病気ですごく細くなっていてぜんぜん動こうとしなかったので，早く元気になってほしいです。　ほかにビーバーが泳いでいたので，寒くないのかなと思っています。
>
> さいごに飼育員さんがペンギンも寒がりと言っていたので，びっくりしました。でもそれならなぜ泳ぐのかなあ。
>
> おしろの動物園はみんなに笑顔をくれてとても楽しくていろいろな動物がすんでいる動物園です。なぜならインコがまねもするし，リスザルがすごく動くし，とても人気があるようだからです。（児童10）

> リスザルの上らへんにストーブがあって，リスザルは寒がりなんだと思った。クマのベニーが冬眠したのは，今日の朝と言っていました。ビーバーはすいすい泳いでいました。オウムのところにヒーターがあったと先生が言っていたので，オウムも寒いんだと思いました。おしろの動物園は行くのがわくわくする場所です。なぜなら，動物がいっぱいいるし，ようく話したり見たりすると楽しくなるからです。（児童22）

同じ個体でも季節によって変化したり，それに伴い世話の仕方に配慮が見られたりする点に気付くことが出来た。生きているものへの思いやりも感じられる。そして何より，自信を持って，自分の気づきや思いを表現する子どもが増えたことが成果である。

これからも気付きをうながす視点の持たせ方や成長を自覚できるような表現・交流のさせ方について探り，主体的に学ぶ子を育てていきたい。

参考文献

松本朱実(2012)「動物園を活用した理科授業-視点を持って観察し、話し合いで認識を深める-」．理科の教育 Vol. 61 No. 720：23-26

小学校学習指導要領解説　生活編

田村　学　編著者(2012)「小学校生活　イラストで見る　全単元　全時間の授業のすべて」東洋館出版社